

飯山市埋蔵文化財調査報告書

田草川尻遺跡 VI

1991・5

飯山市教育委員会

委託者 山口雄三(明宏企画)

はじめに

- ◎ 本書は、店舗建設にともない、平成元年11月に行った田草川尻遺跡発掘調査の報告書です。（飯山市大字静間字四本木2,171の1）
- ◎ 調査は、山口雄三氏（明宏企画）から委託を受けた飯山市教育委員会が実施しました。
- ◎ 調査および報告書印刷に伴う経費は、原因者である山口氏が負担しました。
- ◎ 発掘調査および整理作業は飯山市教育委員会事務局が、下記の方々の協力をいただいで実施しました。（順不同・敬称略）
小川ちか子・高橋ひとみ・大口千鶴子・坂本房江・小林みさを・山崎満枝・川谷せん・青木正子・桃井伊都子（土器実測）
- ◎ 本書の執筆・編集は教育委員会事務局が行いました。
教育長 岩崎 彌・教育次長 佐藤 清・社会教育係長 渡辺 博・同係 望月静雄



田草川尻遺跡航空写真

I 田草川尻遺跡概観

田草川尻遺跡は、飯山市大字静間字四本木から大字蓮字北原にかけて、縄文時代から中世にわたって大集落が営まれた遺跡です（第1図）。

位置的には、長野県の北端に位置する飯山市の南部、飯山盆地が展開する最初の地点に存在しています。西側を形成する斑尾山系より流出する田草川が千曲川に注ぐ、田草川扇状地末端面に立地しています。南側は宮沢川の小扇状地と千曲川の沖積地に接しており、北側は清川扇状地との間の低湿地帯に接続しています。

遺跡は、長野県内でも重要遺跡として登録されていますが、過去において様々な原因によって発掘調査がなされてきました。まず最初の原因は、昭和47年国道117号線静間バイパス敷設工事に伴う調査で（第1次調査）、つづいて昭和52年、工場用地造成にともない発掘調査が行われました。以上によって、弥生時代・古墳時代・平安時代それぞれの家が多く発見され、原始・古代のムラが明らかにされました。また、出土した弥生時代後期の土器を分析をした太田文雄は、北信濃飯山地方における土器の変遷を田草川尻遺跡Ⅰ・Ⅱ式として分類しています。

バイパスが建設されると同時に開発も盛んになり、昭和57年・60年・62年とそれぞれ店舗等が建設されるために発掘調査が行われました。

遺跡は10万平米に及ぶ大遺跡ではありますが、近年特に開発行為が盛んになり、田草川尻遺跡は壊滅の危機に瀕しています。

次	調査年	調査区	調査原因
1	昭和47年	A～E	国道117号線静間バイパス敷設工事
2	昭和52年	F	工場用地造成
3	昭和57年	G	店舗建設
4	昭和60年	H・I	国道117号線改良工事
5	昭和62年	J	店舗建設
6	平成元年	K	店舗建設

田草川尻遺跡発掘調査一覧

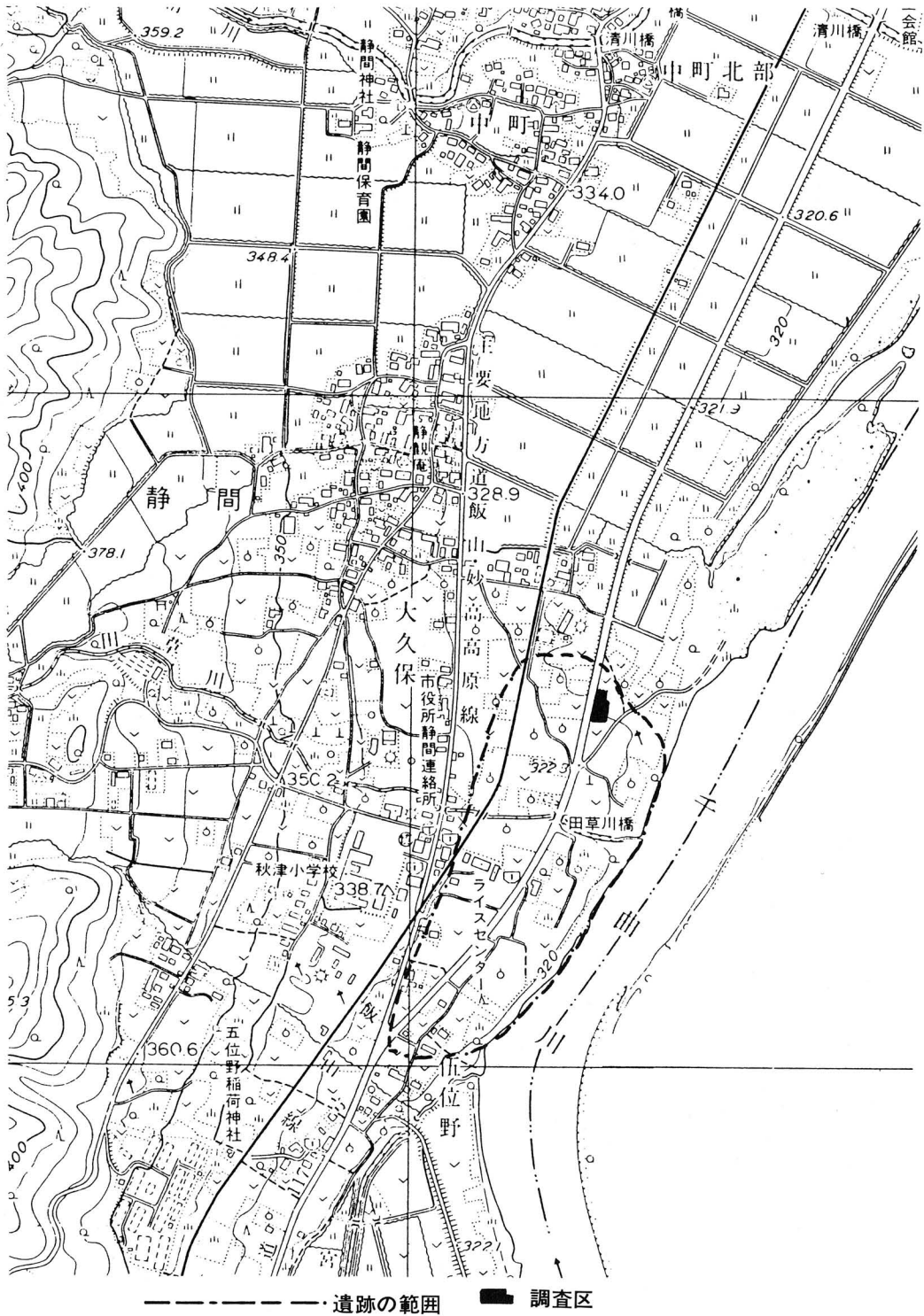


図1 田草川尻遺跡の位置(1 : 10,000)

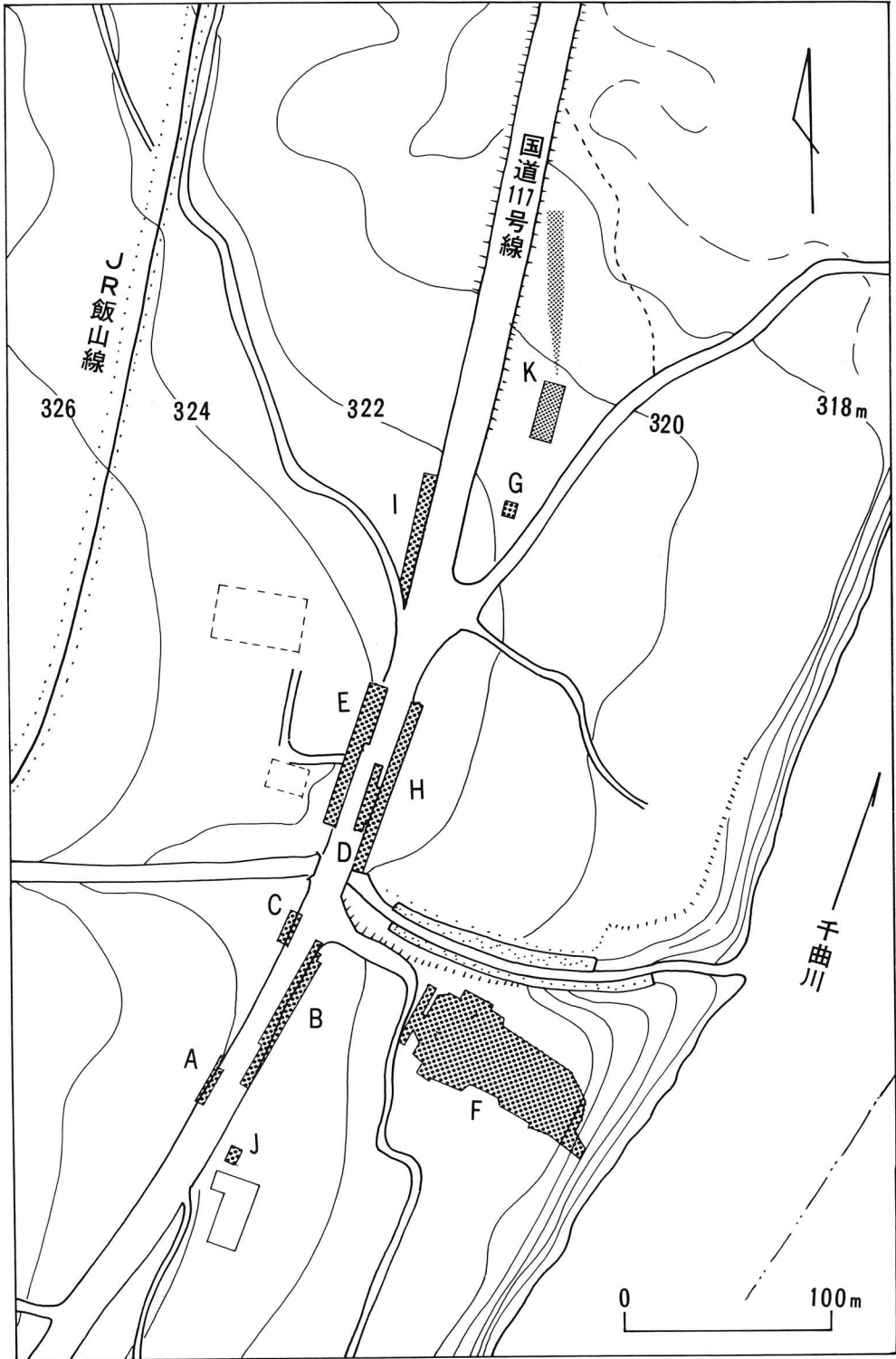


図2 遺跡周辺の微地形及び調査区 (K地点)

II 調査

1 経過と調査方法

平成元年10月17日付で、山口氏（明宏企画）より埋蔵文化財発掘届けが提出されました。山口氏によれば、711㎡の敷地に建坪228㎡の店舗・事務所を建てる予定とのことでありました。文化財保護法では、周知の埋蔵文化財包蔵地内における営利を目的とした開発においては、原因者に費用を含めた協力をいただくことになっており、その旨を話したところ快く了承をいただくことができました。ただし、年度内に工事を着工したいとのことであり、降雪期を前に市内2か所で発掘調査中であつたため、即時調査に入る余裕は全くない状態でした。

県教育委員会からは、11月2日付で事前に調査を実施するように通知があり、山口氏の工事計画に大きな支障をきたすこともできないため、調査を行うこととしました。11月15日付で契約書を取り交し、1か所の発掘調査終了を待って取り掛かることにしました。

調査は、11月18日～21日までの4日間行いました。山口氏の計画した建設予定地約182㎡をバックホーで表土除去し、5mグリットで行うことにしましたが、Bラインは3×5mの変則グリットとなっています。

土層は、A・B-1では50～30cmの表土がありましたが、部分的に土砂の流れ込みや流路が認められ、かなり洪水等を受けた場所であると考えられました。また、A-6では約15cmで地山層に到達するほど浅い状態でした。

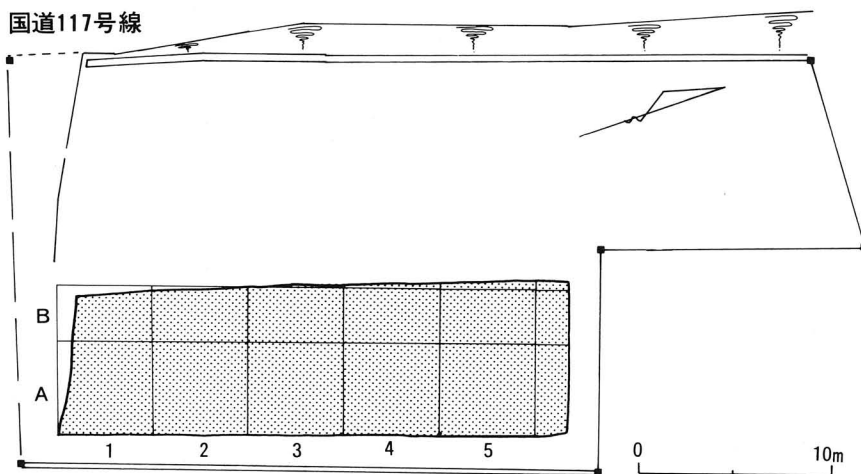


図3 調査区グリット設定図(1:400)



調査区近景



バックホーによる表土除去

2 調査結果

発見された遺構

調査面積は約180㎡で、発見された遺構は、井戸 (SE1) 1基、家(SI1)1軒、土壇(SK1)1基、土器集中地点2 (Loc1・2) です。これを出土遺物から時代判定す

ると	井戸	中世
	家	平安時代
	土壇	不明
	土器集中地点 1	古墳時代
	2	古墳時代以降 となります。

以下に個々の遺構について時代別に説明を加えます。

古墳時代の遺構

土器集中地点

Loc1 B-1グリットより24点の土器がまとまって出土したもので、すべて同一固体です。口縁部分のみの接合を線で示しましたが、すべてが接合しています。出土層位は、30cmの表土・砂質土層10cmの下位に包含されており、出土面も砂を多く含む土層であるので、流れ込みによるものと考えられます。

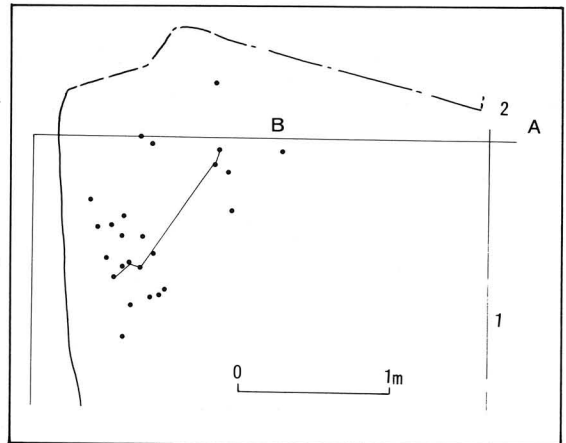


図4 Loc1 遺物分布図



Loc 1 土器分布状態

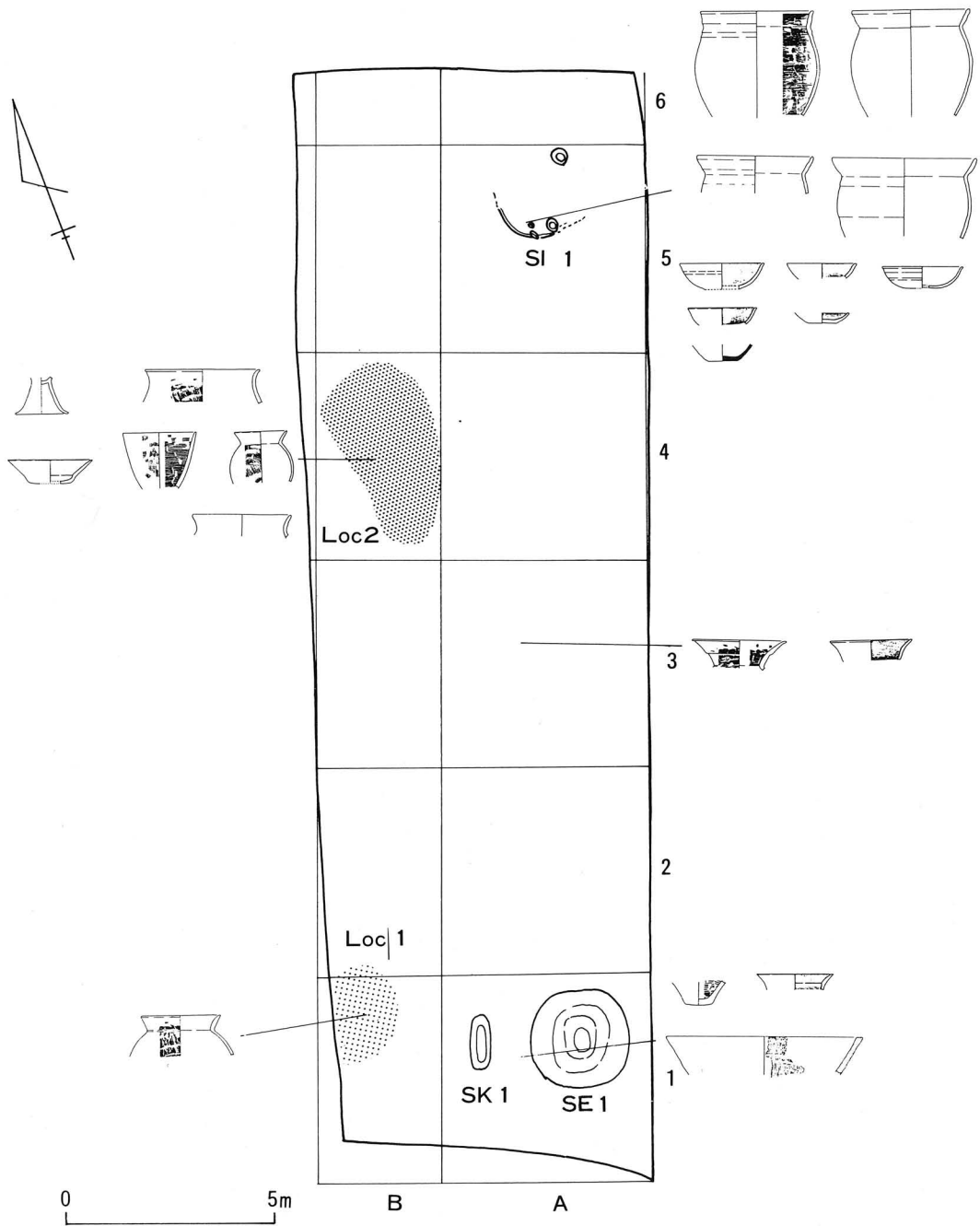


図5 遺物の出土位置

Loc 2 B-4グリットに位置し、砂礫層中からの出土です。弥生時代、古墳時代の土器が混在しており、この砂礫層は古墳時代以降に堆積したものと考えられます。

以上の土器集中地点は、B-1～5まで砂あるいは砂礫層分布の末端面と思われ、西上方より押し出した土砂に含まれていたものと考えられます。

平安時代の遺構

家（竪穴住居址 SI1）

A-5グリットにおいて検出されたもので、表土が浅いために一部分の痕跡のみが判明しました。全体の形態は隅丸方形のIDKで、柱跡と思われる穴2本が発見されています。P₁の西側には扁平な石が2点出土していますが、これはカマドに使用したものと考えられ、本来西南コーナーに構築されていた粘土・石混合のカマドが壊され、2点の石のみが残されたのでしょう。家の中より煮炊き用のカメや食器の坏が多く発見されましたが、ほとんどがバラバラな破片となって出土しました。

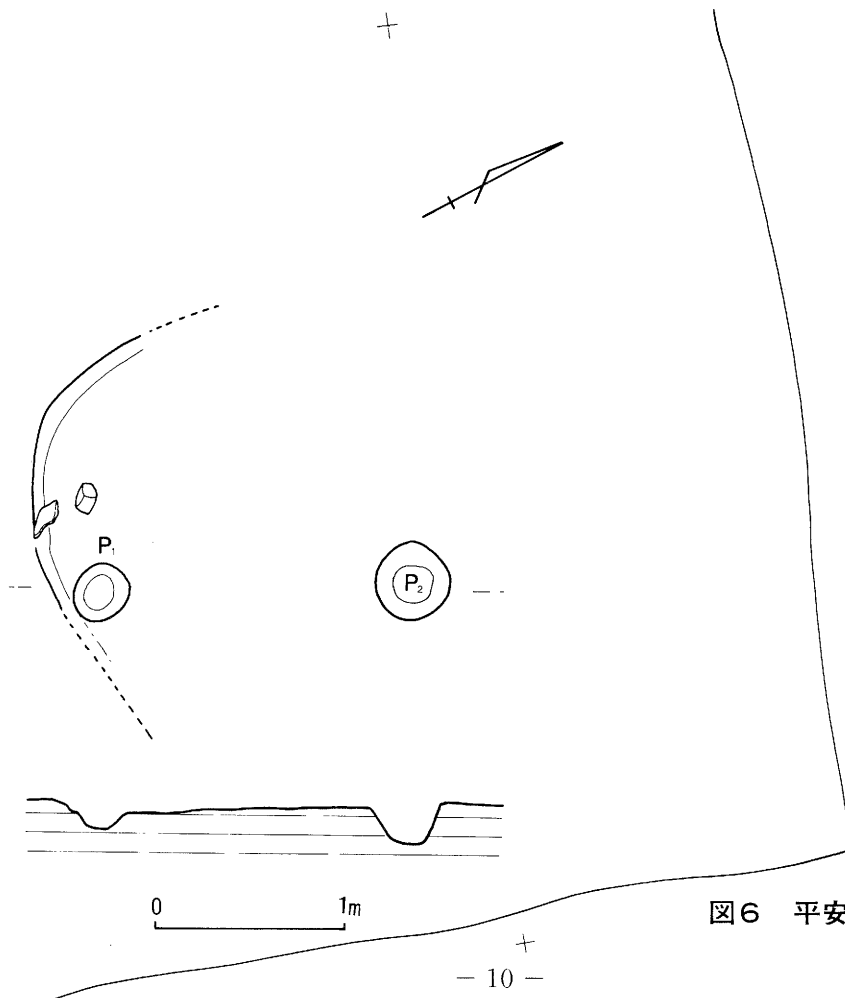


図6 平安時代の家

土坑 (SK 1)

柱や家以外の地面に掘った穴を一般的に土坑と呼んでいます。A-1グリッドで井戸に接して検出されました。52cm×18cmの細長い穴で、深さは22cmを計ります。内部より遺物の出土はありませんでしたので、時代判定はできません。ただし、井戸が中世であることから、これに接するように出土した土坑も同時代の可能性があります。用途は不明です。

井戸 (SE 1)

井戸とするには浅い感じですが、扇状地末端面であることからかつては地下水位が高く、容易に湧出したかもしれません。形態は、径94cmの円形を呈していますが、下方に行くにしたがって長方形を示します。深さは約90cmです。

遺物は、青磁破片が1点底に近い部分より出土していますので、中世以降と考えられます。

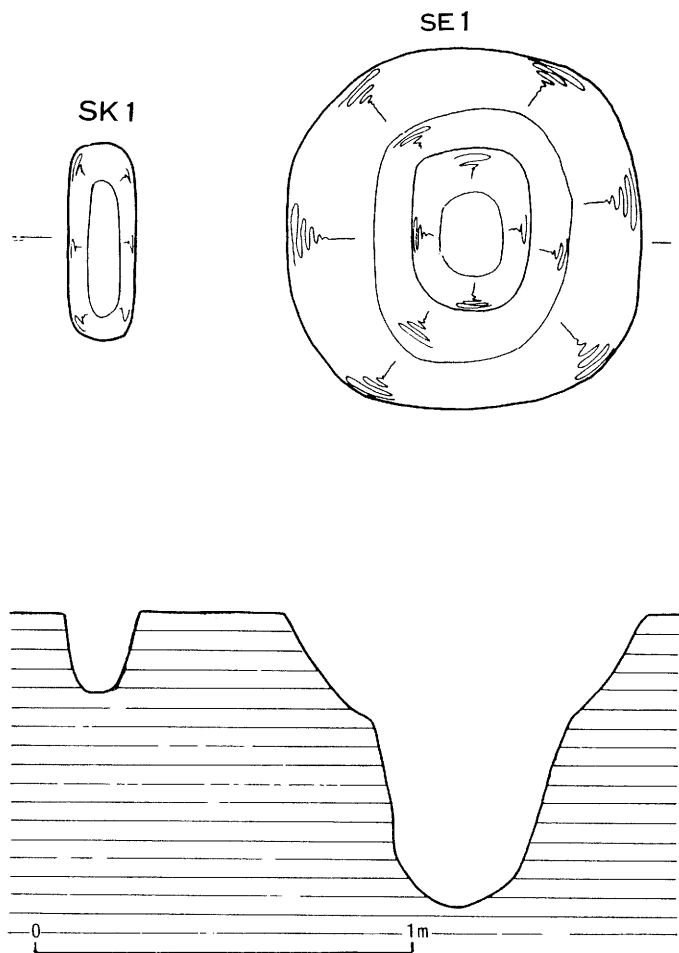


図7 中世の井戸、土坑

3 遺物

焼物

発見された遺物は焼物のみでありました。このうち弥生時代の焼物を弥生式土器古墳時代以降の焼物は土師器（はじき）・須恵器（すえき）と呼ばれています。また、中世の焼物のひとつである珠洲（すず）焼も1点出土しています。

弥生時代（図8・1・2）

2点出土しています。1は、内・外面とも赤色塗彩されており、鉢の下端部分と考えられます。2は高坏の脚部で、1同様に赤色塗彩されています。これらの土器は、弥生時代でも比較的新しい後期の土器で、約1,800年前頃の年代が考えられます。

古墳時代（図8・3～10）

8点出土しています。すべて土師器で、形態には坏・甑・壺・甕があります。

坏（3～5）内面が黒色処理されていますので、この種の土器を特に内黒土器と呼びます。須恵器坏身・坏蓋の模倣である外稜を有する坏形土器で、内面は丁寧にミガキが加えられています。

甑（6） 下端部が少し欠損していますのではっきりしませんが、底を持たない突き抜けている土器で、甑と思われます。ハケメ調整の痕跡が良く残っています。

壺（8） 壺の上部で、口縁部が二段となる特徴的な土器です。ヨコハケ調整が見られます。

甕（7・9・10）

いずれも破損した土器を図上復元したものです。9はやや小型の甕です。

平安時代（図8・11～17、図9・18～22）

12点図示しました。すべて土師器ですが、器種別では坏・甕の二種類があります。

坏（11～17） 内面が黒色処理された黒色土器（11～14）と処理されてない土師器とがあります。底部の判明する土器は、いずれも底に回転糸切り痕をとどめています。

甕（20～22） 全体の分かるものはありませんが、煮炊きに使用された甕です。18・19は、底が平ではなく砲弾形を呈するもので、越後型甕と呼称されています。

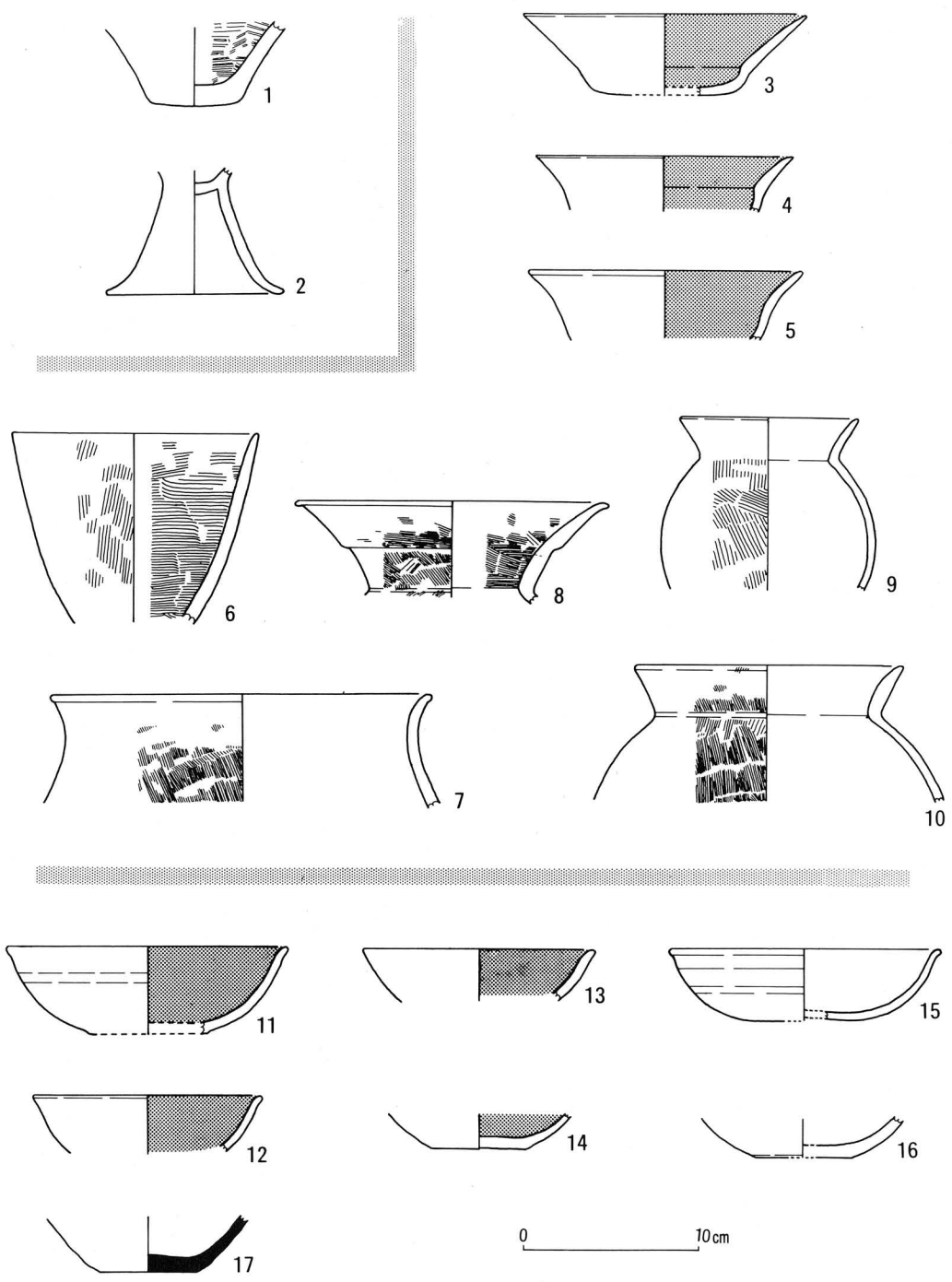
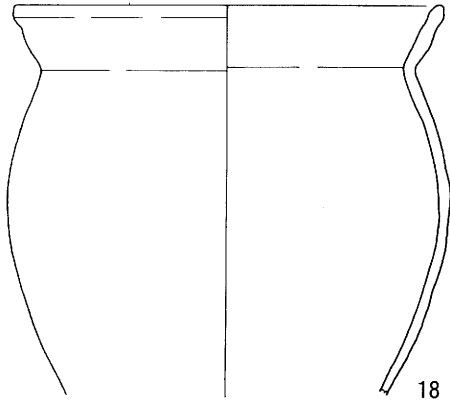
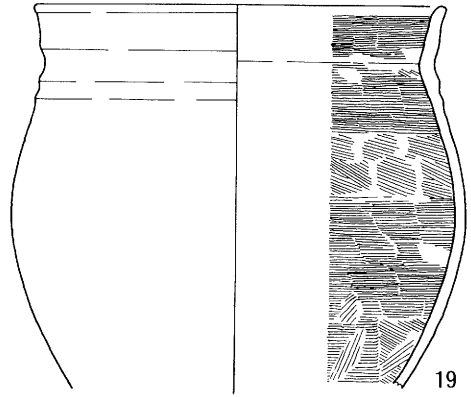


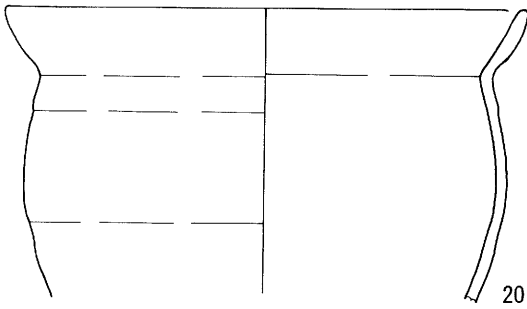
图8 出土土器 (1 : 4)



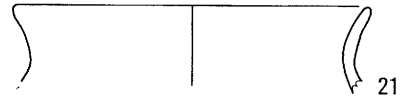
18



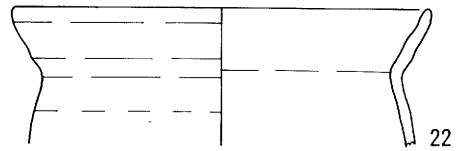
19



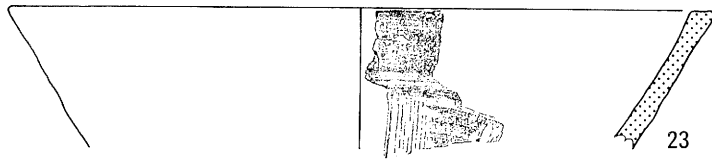
20



21



22



23

0 10cm

图9 出土土器 (1 : 4)

中 世

2点のみですが、発掘区より中世の焼物が出土しています。図示したものは、珠洲焼の摺鉢です。須恵器に似た鼠色をした胎土で、内面に櫛歯状工具で卸目が施されています。もう1点は図示できませんでしたが、井戸内部より青磁破片が出土しています。

III あとがき

以上、出土した遺構・遺物について触れてきました。弥生時代の土器はわずか2点であり、出土状態からも流れ込み、あるいは混入の可能性が大きいと考えられます。ただし、付近に弥生時代の生活の痕跡があることは2点の土器で証明されたと考えられます。古墳時代の土器は、比較的多く出土したにもかかわらず、具体的な痕跡を検出することができませんでした。また、平安時代の家が一軒発見されましたが、大部分が既に破壊されていました。しかし、この地区にまで平安時代の集落があったことが確かめられたことの意義は大きなものがあります。

わずか三日間の調査で、しかも十分な準備も行うことができずに着手することとなり、いくつかの点で反省しなければならないことが多々あります。今回のように民間開発にともなう発掘調査は、大概突発的に組み込まれますので日程的にも大変厳しいものがあります。学術的には問題点も多いと思いますが、原因者の山口氏の埋蔵文化財に対する深い理解を得て進めることができた点を特に記して、あとがきとします。



田草川尻遺跡 VI

1991・5・15 印刷・発行
飯山市教育委員会